

タブ 1

空を絶つ剛腕と、無双を誇る武者鎧。ヒーローのすべてが、数多の羽音が織りなす悪夢のような濁流の前に、今や音を立てて崩れ去ろうとしていた。

都市を襲ったハチのような小型カイブツ。一匹一匹の攻撃など、トウシュウにとっては取るに足らないものだった。カイブツが群れをなして襲いかかろうとも、その大刀を一振りすれば、風圧だけで何百匹ものカイブツを虫けらのように切り裂くことができる。だが、問題はその数だった。視界を埋め尽くす雲霞のごとき群れ飛ぶ小型カイブツたちは、まるで底知れぬ沼から湧き出るかのように、次から次へと無尽蔵に群がってくる。

「きりがない……っ！」

どれほど大刀を振るい、どれほどのカイブツを叩き潰そうとも、空間の隙間を埋めるように新たな群れが殺到する。圧倒的な物量の前、己の意識をすり潰されていくような焦燥感がトウシュウの胸をじりじりと焦がした。己の振るう一撃一撃が体力を消耗させ、強靱なはずの心に「まさか、この雑魚どもに押し切られるのか」というわずかな絶望と恐怖が忍び寄る。

それでもトウシュウは、己の頬を叩き、その誇り高い魂を叱咤した。

「拙者は……こんな虫けらどもに屈するものか！」

咆哮とともにさらなる猛撃を繰り出し、カイブツの群れを薙ぎ払い続ける。しかし、どれほど気力を振り絞っても、小型カイブツはヒーローの全身にまとわりついてくる。

チクッ、と肌を刺すような、蚊に刺されたほどの痛み。それは致命傷にはほど遠く、毛皮に阻まれて、本来なら気にすることすらないはずの攻撃だ。だが、その数があまりにも多すぎた。無数の微小な刺突から注入された神経毒は、何重にも重なり合うことで確かな毒の層を形成し、トウシュウの頑強な肉体を内側からじわじわと蝕んでいたのだ。

「何か、おかしい……？」

やがて、猛攻を続けていた大刀のスピードが、ほんのわずかに、しかし確実に衰え始める。熱を帯びていたはずの筋肉が冷水を浴びせられたように重くなり、指先が痺れ、呼吸が急激に浅くなった。視界の端が白濁し、世界が歪んでいく。あんなにも容易く粉碎できていたカイブツの姿が、二重にも三重にもぼやけて見える。

「体が……動かん……だと……」

信じられない思いで踏み出そうとした足が、まるで鉛のように地面に張り付いて動かない。手にしたパラレルウェポンが、自分の意志に反して指の隙間から滑り落ちる。乾いた地面にカランと音を立てて転がった。

「う、うおおおおッ！」

トウシュウは絶叫と共に、武器のない両腕を振り上げた。恐怖に痙攣する筋肉を、必死の意志で統制し、虚空を叩く。その拳が怪物を砕く感触が、腕から脳髄へと伝わった。

我武者羅に腕を振り回す。今は少しでも時間を稼がなくてはならない。救援を。観測者を。だが、その意思を嘲笑うかのように、雪崩を打ってカイブツの群れがヒーローを飲み込む。

鎧の隙間という隙間、首元、手甲の継ぎ目から、冷たく湿った怪物の体躯が侵入してくる。

顔面に無数の細い足が張り付く。瞼の上を、蠢く感覚が這いずり回る。固く結んだ唇の端。カイツツは容赦なくその隙間をこじ開けようと、湿った口吻を押し当ててきた。鼻腔には、腐った土と甘ったるい体液の匂いが充満する。

そして、聴覚が完全に奪われた。両耳の穴に、這い寄る節足動物が直接入り込んできたのだ。鼓膜のすぐ外側で、ぞわり、ぞわりと、這う音が響く。耳の中で無数の小さな関節が組み合わさる音、硬い殻が擦れる音が、頭蓋骨を内側から削り取るように鳴り響く。押し寄せる羽虫どもの重低音を孕んだ羽ばたきの振動が、脳を直接揺さぶる。羽音が頭の中を埋め尽くし、平衡感覚が狂い、自分の心臓の音すら聞こえなくなった。

トウシュウは両手で顔を覆い、耳を塞ごうとしたが、その手の上からもさらにカイツツが群がり、彼の指を一本一本、剥がしにかかる。押し寄せる重圧、這い回る触感、そして頭蓋を満たす悍ましい音響。

「ぐっ……うう……っ！」

トウシュウは口をパクパクと動かしたが、もはや声帯は貼り付いたように、機能を果たさず、自らの耳の羽音にさえ届くことはない。ヒーローはただ、絶叫すら飲み込まれたまま、生きたまま蟲の巣窟へと変貌させられていく暗黒の底へと沈んでいった。

鋭い大顎が漆黒の装甲を捉える。ガリッ、ミシミシッ、と鉄板が引き裂かれる音が響き渡る。どれほど強靱な願いを秘めた防具であろうとも、無慈悲な数の暴力の前には無力だった。胸元を覆っていた精巧な胴丸の板金が剥ぎ取られ、肩を護っていた草摺りがぐにやりと引き千切られる。カイツツの唾液と濁った体液が混ぜ合わされ、かつて神々しく輝いていた武者装束を容赦なく汚していく。ガリガリと硬質な甲殻と鉄が噛み合う音が止まない。

倒しても倒しても終わらない悪夢の続きを目の当たりにし、トウシュウは力なく膝をつく。もはや抗う力も残されていないことを悟りながら、万策尽きた唸り声とともに、その巨体を冷たいアスファルトへと投げ出したのだった。

道半ばにカイツツに食べられ、存在を消される。結末を残念には思えど、歩んだ道に後悔はない。カイツツからの沙汰を待つトウシュウに訪れたのは……奇妙な静寂だった。

あんなにも狂おしく耳を打っていた羽音がピタリと止む。カイツツはもう襲ってこない。冷たいアスファルトの上で、荒い息を吐きながら、トウシュウは恐る恐る重い瞼を持ち上げた。その視界の先にいたのは、先ほどまでの小型の群れとは違う、異様な姿だった。

そこに立っていたのは、新手のカイツツたちだ。先ほどまでの小型怪物を醜悪に成長させたようなそれは、人間の子供を思わせるサイズでありながら、その外見は生理的嫌悪感を生む。硬質な外骨格の上から不気味に贅肉をつけたような奇怪な肉付きをしており、ブヨブヨと太った身体に不釣り合いな小さな頭には、感情の読めない無機質な複眼が光っている。ギチギチと音を立てて凶悪な大顎を鳴らしながら、トウシュウの巨体に歩み寄ってくる。

もはや指一本動かぬヒーローの体を、中型カイブツたちは容赦なく地面から持ち上げた。麻痺毒に侵され、かつての強靱な肉の張りを失ったヒーローの体は、まるで中身のない布切れのようにぐにやりとだらしなく弛緩し、無防備にその敗北の姿を晒している。

一切の守りを失い、ただ無力に脱力した武者ヒーローの丸裸の姿。仰向けになったトウシュウを取り囲む中型カイブツが、目的を見定めるように複眼と触角を細かく動かした。甲殻を擦り合わせる耳障りな金切り声と、触角を激しく揺らすうごめきが、辺りの空気を異様な熱気で満たしていく。

トウシュウを抱え込んだ中型カイブツ。ブヨブヨと波打つ腹部が、力強く下方に深く湾曲し始めた。腹節の内部に隠されていた、醜悪で、グロテスクな器官が飛び出してくる。それは不気味に腫れ上がった肉の瘤が幾重にも盛り上がり、底知れぬ悪意を孕んだ黒い粘液がぬらぬらと纏わりついて、呼吸するように収縮を繰り返していた。

その先端が、トウシュウの秘部へと正確に差し向けられる。じつとりと蒸れた毛に覆われたヒーローの黒ずんだ肛門。排泄孔としか使用したことのない処女穴。カイブツの産卵管はただ刺さるだけでなく、周囲の肉の抵抗を感じ取りながら、わずかずつ、しかし深く、自らの身体ごとヒーローへ埋めるようにズシリと押し掛かり、器官を奥深くに没していく。

弛緩した筋肉はただその侵略を受け入れていた。一突きごとに肉襲を攻略する無機質なピストンが、徐々にヒーローの奥を拓いていく。

直腸深部に先端が完全に到達した瞬間、カイブツの緊張がピークに達する。外部からはわずかに胸部や触角がピクリと痙攣するように震えるのみだが、生殖管の根元がボコリと膨らんだかと思えば、ヒーローの体内へ、その中身が送り込まれていく。いくつもの卵が括約筋を限界まで押し拡げ、トウシュウの胎内へ送り込まれていった。

数秒、あるいはわずか一瞬の静止のあと、命の授受が完了した確信を得たカイブツは、再び腹部の筋肉を逆方向に収縮させる。苗床深くに埋まっていた産卵管が、体内から引き抜かれるにつれて、粘り気のある肛門の抵抗を心地よく断ち切りながら、ゆっくりと、しかしスムーズにカイブツの腹部へ収納されていった。

しかし、陵辱は終わらない。周囲のカイブツは一樣にグロテスクな産卵管を屹立させており、苗床へ卵を送り込むことを粘液を垂らしながら待ち望んでいた。一匹が産卵を終えたかと思うと、次の一匹がトウシュウに覆いかぶさる。

意識を持ったまま肉人形と化したヒーローは腸内にみっちり卵を植え付けられ、腹がいびつにボコボコと歪んで膨らんでいる。開ききったトウシュウの肛門は、外からも毛だらけの中心にぷっくりとただれた粘膜を晒している。

はあ...はあ...

激しい交尾を終えて、トウシュウの浅い息づかいだけがその場に響いていた。

その時だ。カイブツがそのおぞましい腕を胸の前へと掲げる。怪物の指先が、器用に何かの端を掴んでいた。

それは、風雨に晒され、泥で黒ずんではいるものの、紛れもない現代の工業製品。無機質なクラフト色の、梱包用段ボールだった。

しかも、ただの板ではない。それは誰かの手によって、稚拙ながらも確実に工作されていた。四角い箱の形を保つようにガムテープで補強され、不格好に蓋までついている。

中に何かを詰める、空の箱。

カイブツは、その段ボールをヒーローの目の前に、まるで子供がおもちゃを差し出すように、ぽとりと置いた。

「……あ？」

トウシュウの喉から、掠れた声が漏れた。

あまりに不条理な光景だった。死地、殺戮、陵辱。そうした言葉で埋め尽くされた戦場に、あまりに生活感のある、あまりに平和な四角い箱。

一際大きなカイブツが段ボールを置いた直後、大顎の奥で機械的な、しかし感情の無い音が鳴り響いた。

「ギチ、ギチ、ギチギチ」

その瞬間、トウシュウは先ほどまでの恐怖とは異なる、凍りつくような悪寒に襲われた。このカイブツは、ただの野獣ではない。知性がないと思っていたのは、こちらの思い違いかもしれない。

もし、このカイブツが、荷物を届けるという明確な目的を持って行動しているとしたら？

誰が、何のために？

カイブツの醜悪な外見と、その手にある小綺麗な段ボール箱の落差が、ヒーローの精神を容赦なく踏みこむ。

カイブツはトウシュウを無造作に引きずり、用意されていた無地の段ボール箱へと押し込もうとする。しかし、元が並外れた巨体だ。箱に胴体を無理やり突っ込んだものの、脱力した四肢が外へと盛大にはみ出してしまっている。

「ギチ……」

カイブツは低く鳴くと、はみ出したトウシュウの四肢を無造作に掴み上げて検分した。そして、躊躇うことなくその手荒な作業を始める。おもむろに獅子獣人の関節を掴み、力任せに押し曲げたのだ。

——ゴキリ。

人体の構造として絶対に曲げてはならない方向に、関節が鈍く歪んでいく。骨が砕け、肉がねじれる恐ろしい音がトウシュウの耳に届いた。しかし、神経の末端まで行き渡った麻痺毒のせいで、己の人体が目の前で無残に破壊されているというのに、肝心の痛みは一切伝わってこない。この異常な現実と、痛みすら感じぬまま、声すら出せず人形のように部品として扱われる絶望が、トウシュウの精神を侵していく。

ありえない角度で四肢を無理やり折りたたまれ、詭えたように、あるいは最初から計算されていたかのように、ぴたりと箱の中に収められていく。

視界が狭まっていく中、トウシュウの目から一筋の絶望の涙がこぼれ落ちた。

その潤んだ瞳の目の前で、無慈悲に段ボールの蓋が合わされる。

バリバリッ……！

乾いた不快な音を立ててガムテープが引き裂かれ、箱の開口部が容赦なく封印されていく。最後に差し込んでいた一筋の光が完全に遮断され、完全なる暗闇と圧倒的な密閉感がトウシュウを包み込んだ。気密性の高い箱のなかで、トウシュウの途切れそうな浅い息づかいと、冷徹なカイブツの足音だけが虚しく反響していた。

タブ 2

